課題その他あれこれ

（仙台）木下　彰

昭和二十八年の秋、仙台で才一回大会をもつた村研は、この秋またここで十周年大会を開くことになつた。その間われわれ在仙の会員は、宮城県鳴子温泉における才六回大会開催にも関与したのであるが、とにかく十年なんて早いものだとつくづく感じる。「通信」前号で、竹内教授も述懐されているように、この十年間の村研の歩みは決して素晴らしい発展ぶりとはいえたものでなく、いわば十年一日の如く細々と、しかも短いものであつた。私個人としては、丁度自分の勉強が少しも前進しなかつたここ十数年間と相通ずるものがあつて、ひそかに慰められる感じであるが、しかし他人のこと ― 村研は決して他人ごとではないが ― となると批判し易いもので、村研も十周年を転機に新しい発展を期すべきであると考えたりしている。

細く長く生きるのはたしかに堅実であつて、村研としても会員の数や組織等の発展について何も無理に背伸びする必要はない。もちろん、量的発展も必要であり、かつ好ましいことであるから、若々しく清新な研究者を毎年着実にむかえ入れたいものである。もし、そのような会員が殆んどふえていないとすれば、その原因を追及することが必要である。近時社会学界では、新人の関心が農村問題から遠ざかりつつあるように聞いているが、経済学の領域では理工系に劣らず就職が好調なのと研究者の生活や地位が劣悪であるといつた問題と関連して、大学院進学者は極度に減少し、この研究者養成コースは一般的に全く魅力のない存在と化しており、したがつて、農業経済学を志す新人はやはり甚だ少ない。村研の青年会員数の伸び悩みの理由が、右のような客観状勢のうちにあるものとすれば、それは一応止むをえないであろう。しかし、このような理由の外に、村研の活動が若い人々に魅力を与えないというようなことがないであろうか。われわれの集りは、社会学・経済学・歴史学その他いろいろの専門分野の研究者のなごやかで、しかも科学的精神にみちた学的交流の場をつくりだすことをねらつてきたものである。その点、在来の学会とはいささか性格のちがつたユニークな存在であるとわれ人ともに確信しているが、それだけにこの共通の場をスムーズかつ積極的に発展させるための年々の共通課題の選択はむづかしい。もちろん、テーマの選定にあたつては、いつも真しな討議が行なわれてきたから、その方法はもとより導き出された結論に対し、いまさら文句はないのであるが、私個人の感想からすると、テーマがいわゆる共同体の問題にかかわり過ぎたり、政治体制や実践論的な組織論に傾斜しがちのように思われた。このよ

うなテーマや問題意識の方が、学生はもとより若い研究者たちに魅力的かもしれないが、それにしては若い人が余り寄りつかな過ぎるのである。

このような見地からすると、通信前号における田原音和君の「二つの問題」は極めて示唆的である。社会学的概念規定や研究方法についての問題提起であるが、いわゆる組織論を構造論とは別にではなく、後者のなかで位置づけを行なうとともに、村落構造の変動過程を単に運動論的に把握するだけでなく、むしろこれをも構造論的視野で分析する必要があるとされているように思われる。これは、われわれ農業経済の研究者にとつても必要にして、また正しい態度である。ただ社会学ではこれらの現象を主として人間関係で切つて行くのに対し、われわれはそれらを資本の動き或は経済動向と対応させて把握するという相異がある。それはともかく、農村の構造は常に変動しており、その変動はいわば外からの特定の政治体制の影響力と内からの農民の主体的運動 ― 組織活動によつて実現・展開するものであるが、組織や運動が対応するのは構造であり、変動するのも構造であるから、われわれが最終的に知りたいのは村落構造の性格と形態自体ではなかろうか。

ところで、村落は大きく変貌している。村研でも前に「戦後農村の変貌」を課題としたが、それは主として農地改革その他の諸改革による農村の変化を追及したのであつた。農地改革の村落構造に及ぼした影響は甚大であり、これを経済学や社会学の立場から測定・把握する仕事はまだまだ完成の域に達していないから、われわれはこの課題を捨て去るわけには行かない。しかし、農地改革によつて大きく変つた農村は、その後のわが国経済の新しい展開、近代工業の急速な発展とそれに呼応した都市の発展、とくに四大工業都市を中心とする工業地帯の目覚しい発展によつて新たに大きく変動している。それは、村落の都市化現象の進展であり、農業の近郊農業化の傾向を指すのである。農村が都市的農村となり、農村に工業が新しい立地を求めることが進むにつれて、農民家族の構造も急速に変化し、農家はとうとうとして兼業農家化している。このような地帯を中心として、村の性格はかくして革命的な変動を示しつつあるが、このような変動の様相とその根拠及び意義を追及することは、必ずしも時流に迎合する行き方というべきではないのでなかろうか。私はこのような問題に、村研の関心が向うことをひそかに期待しているのである。